

聖霊降臨後第12主日(特定18)説教

2011/9/4

聖マタイ福音書第18章15節～20節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

聖霊降臨後の期節になってからマタイによる福音書を読み続けています。今日の福音書が含まれているマタイ18章の主題は、「教会生活について」ということです。特に今日の箇所は、教会生活を混乱させる罪の問題が取り上げられています。

新共同訳聖書では、「兄弟があなたに対して罪を犯したなら」と訳されていますが、前の日本聖書協会の口語訳聖書では、「あなたに対して」という言葉がありませんでした。単に「兄弟が罪を犯すなら」と訳されていました。その理由は、聖書の写本に2種類あるからです。「あなたに対して」という言葉が入っているものとなないものがあり、両方とも有力な写本です。それで、どちらを採用するかによって、違いが出てくるわけです。このことは聖書の解釈ともつながってくる問題です。

「あなたに対して」という言葉がなければ、兄弟の犯す罪というのは個人的な関係を越えた、もっと広い範囲、教会全体が問題にしなければならない罪ということになります。そうであるなら、兄弟の罪は自分個人には直接の利害はないけれども、教会全体に関わることだから忠告しなさいということになります。余計なお節介をするような気がしないでもありません。或いは、そのような役割は、しかるべき立場の人に任せておけば良いということになるかもしれません。しかしお節介に思われても、自分の責任範囲を超えていたとしても、見ていて知らんぷりをするのではなく、忠告して上げるのが教会の愛の交わりなのではないか、そう言っているように思われます。しかし、その相手と普段から親しい交わりがないような場合には、現実的にはなかなか難しいことでしょう。

また、その人が自分の考えを正しいものと信じて行動しているときには、それが第三者から見れば、教会の決まりや慣習から外れたものに見えたとしても、忠告がなかなか聞き入れられないことになります。そして受け入れられなければ、それ以上に深入りすることは、人間関係をギクシャクさせることになりますから、ある程度でもって身を引かざるを得ないということになります。

しかし、「あなたに対しての罪」ということになると、自分とその兄弟との間に起きた問題のことです。それによって自分が心の中に痛みを感じたということです。愛の交わりを損なうような害をこうむったということです。もっとはっきり言えば、言葉や行いによって心がひどく傷つけられたということです。そうすると極めて現実味を帯びてくることになります。知らん顔のできない深刻な問題です。

強い人であれば、自分が傷つけられたときに、そのことを相手に対してははっきり言って、話し合うことが出来るでしょう。しかし、みんながみんな強い人間ではありませんから、自分の気持ちを言い表せないままにいることも少なくありません。納得がいけないけれど心の中に納めて時の経つのを待つという、この世の知恵による解決を図ることになるのです。日本人の問題解決の仕方に多いパターンと言えるでしょう。問題が明瞭にならないままに、従って本当の和解に至らないで終わらせてしまう仕方です。恨みばかりが心の底に沈殿して残るような結末となるのです。

今日の福音書は、兄弟に忠告しなさいと勧めています。忠告するということは、ある聖書の訳では、兄弟の「過ちを示す」と訳されています(詳訳聖書)。過ちを「光にさらす、明るみに出す」という意味です。罪が罪であることをはっきりとさせるということです。兄弟に忠告するというのは、そのようにして罪を具体的に明らかにすることです。それが教会の交わりの中で兄弟が行う務めであると、今日の聖書は言っているのです。そして罪が、神さまの前に裁かれることが行われなければ、教会は教会としての使命を果たすことにはならないのです。

個人の問題にとどまりません。社会の中におかしなことが行われているならば、そのことを教会は指摘をしなければなりません。その務めが与えられているのです。そうしなければ、地の塩としての役割を果たすことにはならないのです。

何でもいいやいいやと言って見過ごしたり、責任を問わないで済ませようとするのは間違いです。神さまの赦しのお恵みを、安っぽいものに貶めることになってしまうのです。

教会は、愛の交わりを破壊するような行動や、世俗の論理でもって教会を支配しようとすることに対しては、常に厳しい態度をとってきました。それが制度化され、陪餐を停止

したり禁止したりする措置となりました。わたしは洗礼・堅信準備の時には必ず申し上げることにしていますが、祈禱書の聖餐式の式文の直前にあるルブリック(礼拝執行細字規定)には、「受聖餐者のうち、明らかに大罪を犯すか、言行で隣人を害して主の民の交わりを損なつた者があれば、司祭はその人に対して、その罪を悔い改め、加えた害を償い、または後に償う決心を明らかにしない時は、陪餐してはならないことを告げなければならない。また、互いに恨みを抱く者があれば、前の規則により、陪餐させてはならない」(160～161頁)と厳しく決められています。

この文章を読むと、これは罰則規定のように理解できるかも知れません。しかし、処罰することが目的なのではありません。愛の交わりを傷つけたり、愛に背く行為をすることは、福音に相容れないことだと気付いて欲しいのです。気付いて悔い改め、再び教会の交わりの中に戻って来ることを切に願うことなのです。

この規定は、「教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と見なさない」という、今日の福音のみ言葉に基づいています。

異邦人や徴税人というのは、神さまのことを知らない人、或いは神さまを信じようとしないうで信仰を捨てた人のことです。ユダヤの社会では罪人と同じように見なされて、社会から除外された人々のことです。教会の忠告を聞かない人は、同じように教会の交わりから除外される。聖餐に与ることを、主の食卓に共に連なることを禁じられるような措置が取られたのです。つまり破門であります。

しかし、イエスさまは、罪人とか徴税人と呼ばれた人々と食事を共にされたことを、忘れてはなりません。イエスさまの関心は、罪を犯した人にあります。その人が決して滅びることのないように、神さまのみ恵みの中に引き入れることであつたのです。今日の箇所直前には、「迷いでた羊のたとえ」が語られていますが、イエスさまは迷いでた一匹の羊を何処までも探し求めることを命がけでしてくださつたのです。

教会を破門されたとしても、現代においては、特に日本のようなクリスチャン人口がわずかでしかない社会では、何の有効性もないかも知れません。しかし、信仰上の問題とし

ては大問題です。その人に命に関わる問題です。そればかりではなく、それによって教会全体もまた傷つき、歪められることになってしまうのです。

従って、このようないわば教会の権力の発動ということは、慎重の上にも慎重が期せられなければなりません。まかり間違えば教会が神さまに代わって人を裁くということになりかねないわけですから、余程の場合以外は、このような措置を取ることは避けなければなりません。たとえば、初めから教会を混乱に陥れようとする目的で、信者を装って教会の中に紛れ込んできたような場合には、やむを得ず強い態度をとることもありうるでしょう。これは、かつて、ある教会で実際に起こったことです。このような場合であっても、魔女裁判になりかねないこともあるわけですから、教会が権限を行使する際には、細心の配慮が払われなければなりません。

自分の罪を罪と認めることは苦しみの伴うことです。自分を否定しなければならないというような、厳しく辛いことです。だから、出来ればそのようなことから逃れたいし、ほかの人のそのような苦しみに拘わりたくはないという思いも強く先に立つわけです。

しかし、罪を明らかにするということは、同時に悔い改めを促すことでもあります。悔い改めを促して、それまでの考え方やそれに基づく行動、生き方の過ちに気づき、それを認め、そこから解き放たれて新たな人生の歩みを開始できるように祈り求めることです。そのことを通して、イエスさまの苦難と甦り、死と復活のさまにあやかるのです。そして新たな命の恵みの中に立つように、兄弟を招くのです。

今日の福音書の直前の「迷いでた羊のたとえ」は、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(14節)というみ言葉によって締めくくられています。罪を明らかにすることは、裁いて罰を与えることに、その目的があるわけではありません。また、自分の恨みを果たすためでもありません。そうではなくて、神さまの愛の御心を実現するためにほかなりません。神さまの赦しが、赦しとして真実に受け止められるためのステップとして行われるのです。

そして、このことは密かに行われるべきことであります。「一人か二人、一緒に連れて行きなさい」(16節)とはそのような意味です。公衆の前で見せしめのようにして行うことで

はありません。ましてや、兄弟の罪を暴き立て、言いふらすようなことがあってはなりません。神さまは罪を犯した人に、変わる事のない愛の眼差しを静かに向けていてくださるのです。

兄弟の罪を忠告するという、大変困難な業を、キリストに連なる者には愛の務めとして与えられているのです。言い難いことです。出来れば避けたいことです。相手に受け入れられないかも知れません。そのようなことを言う資格は、自分には全くないと思うかも知れません。

しかし、自分自身が神さまの赦しの中に生きていることを深く知るのであれば、同じ恵みの中に兄弟を招き、主の憐れみの中に共に立つことが、教会の交わりを形成することになるのではないのでしょうか。「二人または三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいる」と言って、イエスさまはわたしたちを愛の交わりの中へ招いてくださいます。

このイエスさまのみ言葉に深く信頼を寄せて従って行くことで教会は成り立ちます。わたしたちの教会が、主の愛に生きる交わりとなることができるように、導きを切に求めたいと思います。